

「報恩感謝の合掌」

吉田 顯成

以前に、「ある公立小中学校で、子供たちが給食のときに『合掌』の号令とともに手を合わせており、父母の一部から特定の宗教を強制するものと中止を求める声が上がって、取りやめた学校も出ている。」ということが新聞に取り上げられ話題になりました。この記事を見て、奇異で大変心寒い感じを持ちました。

合掌は必ずしも真宗だけの、特定の儀礼ではありません。私たちの生命をはぐくんでくれる食物への、ありがたく思う心を表した姿、「謝念」ということであります。人間が謝念を失ったとき、傲慢になり、人間関係は冷却し、暮らしにくい世の中になりました。謝念は言葉や態度に表し、人に伝わってこそ意味があり、自らの心にそれを育むことができ、はじめて人は心豊かに育って行くことができるものと思います。

手のひらを合わせてする合掌という動作は、洋の東西を問わず、宗教のいかんにかかわらず、ものの有り難さ、祈りや敬虔の心が外に現れたならこうなる、というごく自然な一般的な動作であり、仏教の、それも特定宗派の礼拝様式であると決めつけることはありません。謝念の表現を禁止しようとする考えこそ問題なのではないでしょうか。

手を合わせて拝み合う姿は「敬い合う姿」で、尊い美しいものであります。幼児の躰は、言葉、理屈よりも形から始まります。“のの様”に手を合わせておまいりする姿はこの上なく宗教心を育むものでしょう。

浄土真宗の教えは、日常生活の出発、あるいは帰るところがいつでも報恩感謝の心、深い満足の心である事です。よく昔のお年寄りの方は「お陰様で、マンダブツ マンダブツ」と日常生活の中で申しておられました。あそこに報恩感謝があり、頭の下がる世界が実現しているのです。

生かされているという自覚、また罪を犯さずには生きられぬという自覚は、『合掌』という報恩感謝の表現でのみ養われるのです。